

令和元年度の研究(または活動)内容

当研究所は、建築、ものづくり、農業、鉱工業、アートなど、地域の資源・環境を活かす技術を「地技」と定義し、地技を活かした生業に着目するとともに、それが周辺環境とどう呼応しているかにも関心を広げ、「生業景」という総体の価値向上につながる場、モノ、組織等の共創・継承デザインについて研究を行うことを目的としている。

初年度となる今年度は、まず前身となった科学技術振興機構・社会技術研究開発センターの助成研究開発プロジェクトを総括しながら、研究の根幹となる基礎概念を整理・確定した。つくり手・つなぎ手・つかい手・ささえ手の関係性を見直し、グローバル経済だけに依存しない循環型社会の再構築をめざしたものであり、「生業景」の概念創出に至った研究開発プロジェクトである。共通命題「多世代共創」に示唆を得て、地技の共創様態を共同アトリエ(コアトリエ)と呼び、15 のワークを実践し、その創出・育成・支援をはかった(図 1)。

続いて、「生業景」当研究所の企画・設立をすすめ、その基本的な活動方針を討議・構想した。すなわち、東北各地の地技を前身研究から引き継ぐ「情報基盤」、具体例の創出育成を進める「生業再生」、地域資源の発掘を地域とともに進める「学習支援」、それらを含めた地域景観の醸成に協力する「景観育成」の4つの柱を見出し、それらを螺旋昇華型で漸進させるというものである(図 2)。

こうした基本構想のもと、今後の研究の多様な展開可能性を考えるため、生業景デザイン研究所開設記念シンポジウムを行った。NHK「民藝のレッスン」などで知られる哲学者の鞍田崇氏、精神世界と実存事象を複眼的にみつめる写真家の田村尚子氏らを招き、生業景および生業景デザインの概念の捉え直しと可能性について議論を深めることができた(図 3)。

これらを踏まえながら、生業景デザイン研究所ホームページの構想を重ね、年度内にデザインと公開を行うに至った(図 4)。

こうした共通ワークを重ねながら、末尾に示した学会大会等での研究発表、専門誌や新聞記事の執筆対応、企業や地域からの相談対応、受託研究などを進めた。

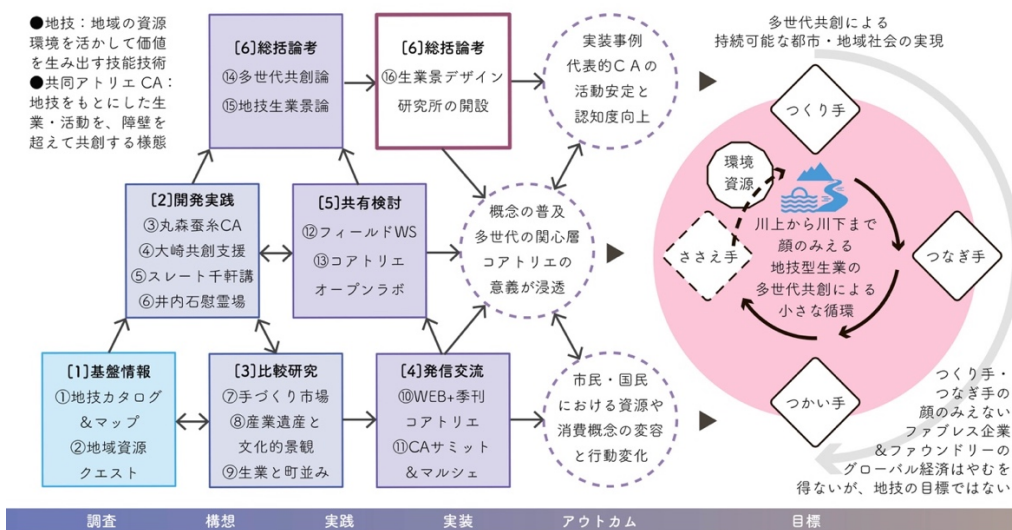


図 1 前身となった研究開発プロジェクト「農山漁村共同アトリエ群による産業の再構築と多彩な生活景の醸成」におけるロジックダイアグラムのなワークフローと目標とする循環型社会のイメージ

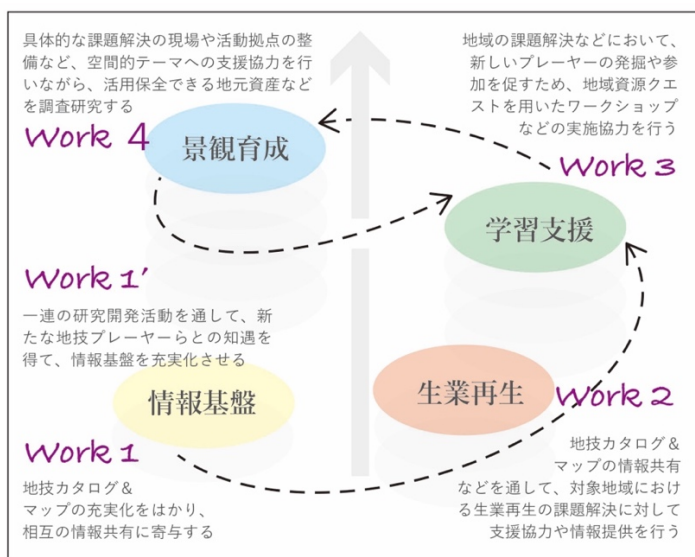


図 2 生業景デザイン研究所における4つのワークと螺旋昇華型のデザイン研究概念



図 3 生業景デザイン研究所開設記念シンポジウム「この地から醸成する東北の生業景」フライヤーおよび登壇者討議風景(最上段の2名は写真家の田村尚子氏と哲学者の鞍田崇氏)



図 4 生業景デザイン研究所ホームページ(ロゴおよび WEB デザイン:メディアストラータ)